

## 市町村立図書館の皆様へのメッセージ 酒井館長と菊池総括責任者から

### 地域の復興を支える図書館を目指して

岩手県立図書館  
館長 酒井 久美子



この春、高橋和雄前館長の後任として図書館の管理運営の仕事に携わることになった私は、基本の習得もそこそこに、いきなり復興支援という応用問題からのスタートを余儀なくされました。その主たるものは、被災した県内の図書館の復旧・復興に向けた被災資料の救済や住民の読書活動の支援等です。前例のない手探りの中での取り組みには多くの困難が伴いましたが、この半年間、スタッフをはじめとする図書館を愛する多くの方々の熱い心と叡智そして広範なネットワークやたくましい実践力に支えられ、相応の成果をあげることができたと思います。改めて衷心より感謝申し上げます。この活動によって再認識させられたのは、地域のかげがえのない歴史や文化の継承に、そして地域づくりに図書館が果たす使命の重要性であり、復興に向けたしなやかな原動力、生活や心の潤い、そして明日への希望を支える「知や情報の拠点」という重要な役割を担っていることの確かな証です。それこそが、まさに「図書館の底力」ともいうべきものでした。復興への道のりは長く厳しく、また支援活動も道半ばではございますが、「地域の復興を支える図書館」のあるべき姿を模索する一方で、それぞれの地域の特性を活かした「地域住民の役に立つ図書館」づくりを、市町村立図書館の皆様とともに進めてまいりたいと思います。今後とも変らぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

### ふるさとの話

岩手県立図書館指定管理者  
総括責任者 菊池 敏雄



ふるさとの話をさせてください。私は沿岸の釜石市出身です。釜石市といっても世界遺産登録を目指す橋野高炉跡のある山間部橋野の生まれですが、釜石はわがふるさどです。

子どものころから、恐ろしいものとして聞かされたことが二つあります。一つは第二次世界大戦の艦砲射撃のこと、二つは津波のことです。艦砲射撃の大砲の音は、釜石の町から遠く離れた谷間の村でも、この世の終わりとはばかりの爆音だったのでしょうか。津波の話は曾祖母から聞きました。昭和8年3月3日の三陸大津波直後、釜石で見聞きしたことの話でした。

お盆の頃のNHKニュースで、「艦砲射撃の研究に心血を注ぎ、開設に尽力した戦災資料館の資料ともども津波の犠牲になった」、昆男郎(こん・ゆうろう)さんのことを知りました。「歴史は過去の囁語(ささやき)[ぼやきの意味]に非ず。未来の指針にして警策(きょうさく)なり。」映像で紹介された、水を含んだ昆さんの著書『釜石艦砲戦災誌(略)』の後書です。

県立図書館は、このたびの大震災の記録を収集、整理し、後世に引き継ぐための取り組みを始めました。当館の力だけでは「指針にして警策」たりえません。市町村の図書館の方々のご協力も頂戴しふるさとの話を伝えていくことで防災と復興に微力ながらも寄与しようと考えているところです。それが犠牲になられた方々への鎮魂であり、現在そして百年後、千年後のふるさとに生きる人々への、公共図書館としての責務であると考えているからです。